

方広寺の概要と歴史

方広寺は日本で建てられた建築物の中でも最も壮観な建物のひとつがあった場所であり、17世紀の初頭に日本を揺り動かした政治的な対立の着火点となった場所でもある。

2人目の天下統一者である豊臣秀吉（1537～1598年）の軍事的な才能と巧みな外交力によって、1580年頃までには100年にわたる戦争（戦国時代）は終わりに近づいていた。秀吉は、天皇のいる都を支配下に置くと、過去の先例にならって、自らの設計によって京都の街を全面的に再建する計画に着手した。都市化された中心部の周囲に堀をつくり、御所を改修し、京都で初めての石橋を鴨川にかけた。しかし、秀吉の最も野心的なプロジェクトは、京都の東の端に新たに建設した方広寺における大仏殿の建立であった。

精力的な資金調達のキャンペーンが始まり、秀吉は全国的な武装解除（刀狩り）で集めた武器を鋳溶かして、仏像の建設のためのかすがいをつくることを誓った。民間人を武装解除するという他に、これには秀吉にとって善徳を積むという効果があった。また政治的な意図も明確にあった。巨大な仏像と仏殿を建立することで、秀吉は明らかに聖武天皇（701～756年）の例にならおうとした。聖武天皇は8世紀に、奈良の大仏の建立によって、国家の統一を大きく押し進めたのである。

方広寺の仏殿が1589年に奉獻された当時は、これは日本の歴史上最大の建築物であった。横幅は90メートル、奥行きは50メートルあった。この建物は周囲を切り出してきた巨大な岩を並べてつくった壁に囲まれた盛り土の基壇の上に建てられた。この壁の大部分はこの場所に今でも残っている。いくつかの壁（岩）には、おそらくは後で岩を割るために、職人が鑿で開けた大きな穴の列が残っている。当時制作された京都の街の鳥瞰図に描かれている仏殿は（特に舟木本の洛中洛外図屏風）、京都の東の端を占拠している、巨大な建物として姿を見せしている。残念なことに、もとの建物は1596年の地震によって倒壊してしまった。そのすぐあとに再建が始まったが、1598年の秀吉の死去によって中断された。そして、秀吉の若い後継ぎである豊臣秀頼（1593～1615年）と武将の徳川家康（1593～1615年）の間の長きにわたる政治闘争が始まった。この状況下において、方広寺の再建は豊臣家に対する持続的な支持の象徴となり、家康はこれを止めさせようとした。

1610年、秀吉は方広寺の巨大な銅製の鐘の再建を特に対象とした資金集めのキャンペーンを開始した。鐘の鋳造は1614年に完成したが、奉納の儀式は家康が異議を申し立てたために突然中止された。後から見ると政治的な日和見主義の顕著な例に見えるのだが、家康は、鐘に刻まれた銘文によって不愉快になったと主張したのだ。自分の名前が失礼なかたちで刻まれている、というのがその理由だった。奉納は中止され、徳川家と豊臣家の間の緊張は

悪化し、やがて 17 世紀半ば頃までには豊臣家はほぼ無力化されていくことになる。今日方広寺にある銅製の鐘は、1614 年に鑄造されたものである。明治時代に建てられた、美しく保存されている鐘楼に納められ、家康を激怒させた銘文もはっきりと読むことができる。

徳川によるこの事業への反対や、いくつかの大地震が合わさって、方広寺がもとの栄光ある姿に再建されることは二度となかった。しかしながら、この地に現在立っている方広寺には、鐘のほか、いくつかの像、そして巨大な石の壁など、創建当時の宝物が数多く残されている。